遊び場としての児童館の評価

ー山口県内の児童館を対象として

赤星敦美*・橋本　脩**・山本善積

Evaluation of Juvenile Welfare Institutions as Playgrounds
—Survey of Juvenile Institutions in Yamaguchi Prefecture

AKABOSHI Atsumi, HASHIMOTO Osamu, YAMAMOTO Yoshizumi

(Received September 28, 2012)

1．研究の目的と方法

子どもたちが放課後を安心して過ごす場の１つとして、以前から児童館がある。最近の傾向としては、共働き家族の増加に伴い、学童保育所で放課後を過ごす児童が増え続けている[1)]。さらに、2006年に政府が発表した「放課後子どもプラン」によって、全ての児童を対象とした放課後子ども教室推進事業が学童保育と一体的あるいは連携して取り組まれるようになった。児童館は児童だけでなく、幼児や高学年児童、中高生なども受け入れる施設であるが、この３つが放課後の居場所としてつくられている空間であろう。

児童館は、児童福祉法に基づく児童厚生施設の１つで、地域において児童に健全な遊びを与えて、その健康を増進し、又は情操をゆたかにすることを目的とする児童福祉施設である。この児童館には、小型児童館、児童センター、大型児童館（この中にＡ型、Ｂ型、Ｃ型の３種類がある）などがあるが[2)]、これらのいずれの児童館でも、屋外の厚生施設として児童遊園が位置付けられており、330㎡以上の広さで、遊具、広場、ベンチ、トイレ、照明などが必要とされている。一般的な都市公園と比べると小さな遊び場であるが、外遊びも不可欠なものとして位置付けられていることが分かる。

厚生労働省「社会福祉施設等調査」の2010（平成22）年10月１日の結果によれば、小型児童館が2,594、児童センターが1,616、大型児童館Ａ型が19、Ｂ型が４、Ｃ型が１、その他の児童館が111、あわせて全国の児童館は4,345館ある。これらの児童館に従事する職員は小型児童館に8,858人、児童センターに7,274人、大型児童館に544人、その他の児童館に353人、あわせると17,027人である。児童館数を2005年と比較すると、小型児童館は2005年が2,897で302館の減少、児童センターは1,691で75館の減少、大型児童館はＡ・Ｂ・Ｃ型の合計23で、１館の増加、その他の児童館は108で3館の増加、児童館全体では4,716館から4,345館に371館の減少である。最近5年間の変化ではあるが、後退傾向は歴然としている。

山口県には2010年度末で児童センターに該当する山口県児童センターと小型児童館39館がある。小型児童館は14市町にあるが、子どもの人数に応じてつくられてはいない。多いのは、山陽小野田市の８館、周南市の７館で、下関市は４館、山口市も４館、宇部市は１館と市町に

*（株）エバーライフ　**エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ（株）

よって児童館数に違いが見られる。しかも、山陽小野田市の児童館では、多くの館に放課後児童クラブ（学童保育所とも言うが、以下では児童クラブと呼ぶ）が併設されている。さらに防府市では隣保館も併設されており、こうした地域施設を含んだ児童館も多く見られる。つまり、児童館の位置づけは各市町によって違っているということである。それをよく示す例が2011年開設の萩市立児童館である。県内の多くの自治体が児童館の新規建設計画をもたない中で、萩市の児童館は、児童クラブと市立図書館を併設し、県内の市町では唯一の大型児童センターに該当する施設である[3)]。はたして、児童館は全国的傾向に見られるように、もはや必要ではなくなったのだろうか。

本研究では、山口県における児童館の利用実態をつかみ、今後の児童館がどうあるべきかを考察することを目的とした。そのために、山口県児童センターを除く県内の児童館全てを対象としたアンケート調査（郵送）を実施した（山口市の４館は2009年に調査を行い、36館は2010年に実施した。回収は27で回収率は69％であった）。また、山口県の児童館は、①児童館のみの施設、②児童クラブを含む施設、③児童クラブとその他の機能を含む施設、④その他の機能を含む施設に分類できるが、①、②、③の代表的な児童館3館と山口県児童センターについて聴取調査を行った。

表１　山口県の児童館の分類

番号	所在地	設置年	運営主体	分類
1	下関市	1984	①	A
2		1986	①	B
3		2000	①	A
4		2008	①	A
5	宇部市	1980	①	C
6	山口市	1968	②	D
7		1972	③	A
8		1978	①	C
9		1990	②	B
10	防府市	1974	①	C
11		1976	①	C
12		1977	①	C
13		1978	①	C
14	下松市	1965	②	A
15		1979	①	D
16	岩国市	1970	①	D
17		1978	①	D
18		1981	①	B
19	光市	1980	①	B
20	柳井市	1980	①	D
21	美祢市	2001	③	B
22		1988	①	B
23	周南市	1967	②	A
24		1971	②	C
25		1972	②	C
26		1980	②	C
27		1988	②	A
28		2002	②	B
29		2005	②	B
30	山陽小野田市	1981	①	D
31		1995	②	B
32		1996	②	B
33		1996	②	B
34		1998	②	B
35		1999	②	B
36		2003	②	B
37		2004	②	B
38	周防大島町	1982	①	C
39	平生町	1998	①	B

２．山口県の児童館の概要

表１に山口県児童センターを除く山口県の児童館の一覧を示した。39の児童館の所在地はこの表のとおりであるが、これまでなかった萩市に新たな児童館が2011年から加わったことになる。

設置年を時期別にみれば、最も古いものが下松市の1965年の児童館で、これを含めて1960～69年が3館、1970～79年が11館、1980～89年が11館、1990～99年が7館、2000年以降が７館である。2000年以降に設置された児童館があるのは、下関市、美祢市、周南市、山陽小野田市であり、これに2011年設置の萩市が加わる。これ以外の多くの自治体は、児童館の新規設置を施策としてもっていないと推測できる。

児童館の運営主体は3種類ある。まずは、設置した市町である（①で示したもの）。次に、各市町の社会福祉協議会である（市町から運営委託されたもので、②で示したもの）。これらの市町と市町社会福祉協議会が主な運営主体であるが、運営委員会や保育園といったその他の団体もある（③で示したもの）。下関市、防府市、岩国市等は全ての児童館を市が運営しているのに対して、周南市、山陽小野田市など児童館が多い

自治体は市の社会福祉協議会に運営を委託している。

もうひとつ、この表で示したのは、児童館の機能の分類である。児童館専用施設（A）が7館、児童館と児童クラブの併用施設（B）が16館、児童館と児童クラブに加えて、その他の機能ももった施設（C）が9館、児童館とその他の機能をもった施設（D）が7館ある。すなわち、39館のうち25館（64%）には児童クラブがある。このように、児童館は児童クラブの活動にとっても重要な空間になっている。ちなみに、山陽小野田市では、12の児童クラブの中の7箇所は児童館で行われている。

3．代表的なタイプの児童館

小型児童館には職員として2名以上の児童厚生員を配置し、また、建物設備として集会室、遊戯室、図書室及び事務室を設ける他、必要に応じて相談室、創作活動室、静養室を設けることになっている。

（1）児童館専用施設

A児童館は敷地面積1,285㎡で、施設の床面積は329㎡、屋外遊戯場[4]が272㎡である。主な空間は、遊戯室、集会室、図書室で、この他に事務室、授乳室、湯沸室、便所がある（図1参照）。屋外空間には、屋外遊戯場以外に駐車場（17台分）、駐輪場、ベビーカー置場がある。職員は館長1名（専任）と児童厚生員2名をあわせた3名である。この児童館に隣接して図書館、公園があり、近くに公民館等の公共施設もある。図書館に寄ってから児童館に来る子どももいて、この近接性は効果が大きいと言える。公園は児童館から直接行けるようにはなっていないので、児童館に来る子どもたちの遊び場ではない。

屋外遊戯場は児童館入口と反対側にあり、車の通行や駐車などから安全になっている。大型複合遊具や砂場が設置され、幼児も安心して遊ぶことができる（写真1）

室内の遊戯室は広い遊び空間で、大型積み木、滑り台、卓球台が置かれている。ままごとなどの遊びもよく見られる。また、保護者同士が話し合ったりする光景も見られる。集会室にはじゅうたんが敷かれ、行事に利用される他は自由な遊び空間である（写真2）。狭いので、休日には乳幼児や児童で込み合うことがあり、指導員も保護者の協力を得ながら安全確保を図らねばならない。図書室には隣にある図書館や地域の人から寄贈された本が置いてある。また、パソコンが3台あるが、とても人気があり、各自の利用時間を決めて使っているそうである。1日当たりの平均利用人数は2008年度で112名と山口県児童センター以外の県内の児童館では最も利用人数が多い。ことに乳幼児及びその保護者の利用人数が多くなっている（山口県子ども未来課資料による）。

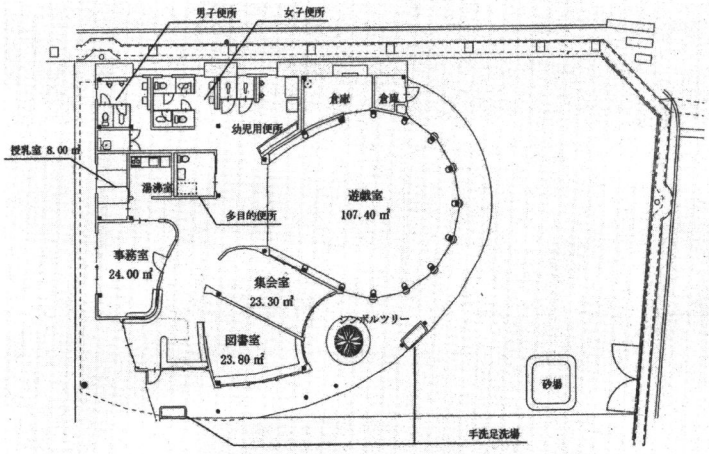


図1　A児童館（児童館専用施設）の平面図

（2）児童クラブと併用した施設

B児童館は敷地面積2,379㎡で、施設の延床面積は902㎡である。小学校の近くにあり、児

写真１　Ａ児童館の屋外遊戯場

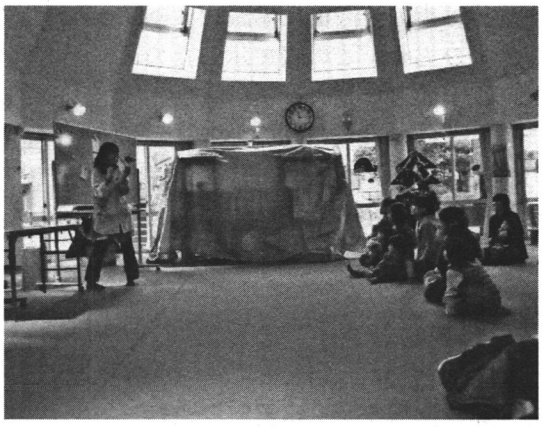


写真２　Ａ児童館の集会室

童クラブには適した場所にある。敷地面積はＡ児童館よりかなり広いが、入口周辺のスペースは駐車場になっており、外遊びの屋外遊戯場は確保されていない。そのため、外遊びには小学校の校庭を使っている。職員は館長１名（専任）を含め３名である。この人数で児童クラブも行っているので、負担が多くなっている。人数は十分とは言えない。

Ｂ児童館の平面図を図２に示した。この児童館は、以前は図書館として使われていたそうで、遊戯室に充てられているのは集会室と和室である。和室は畳敷で、本を読んだり、幼児が遊んだりできる環境である（写真３）。約10m×25mの広い集会室には卓球、ピアノ、エレクトーンが置かれ、年齢に関係なく子どもたちに利用されている。隣の児童クラブ室には教室のように机と椅子が置かれて、この部屋は勉強などに使われていた（写真４）。児童クラブの2010年度の登録人数は54名で、増加傾向にあるとのことであった。

児童館は午前中には乳幼児の遊びや母親クラブの活動に利用され、午後からは児童クラブの活動に利用されて、一日中施設が活用されている。2008年度の１日当たりの平均利用人数は54名となっている。これは、ほとんどが児童クラブの人数であり、それ以外の利用者は多くない（同上資料による）。

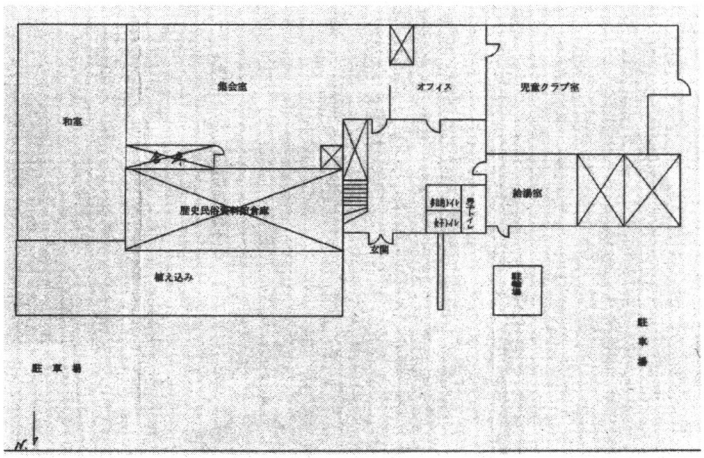


図２　Ｂ児童館（児童クラブを含む施設）の平面図

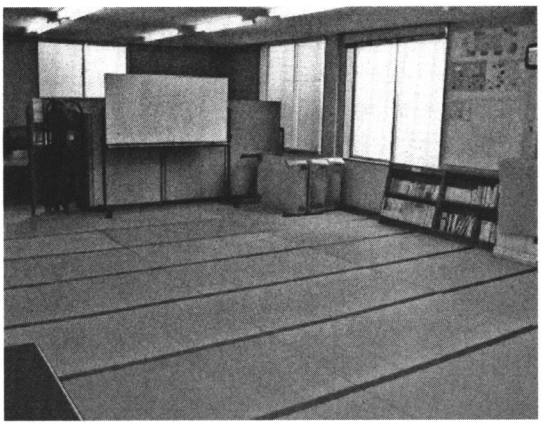


写真３　Ｂ児童館の和室

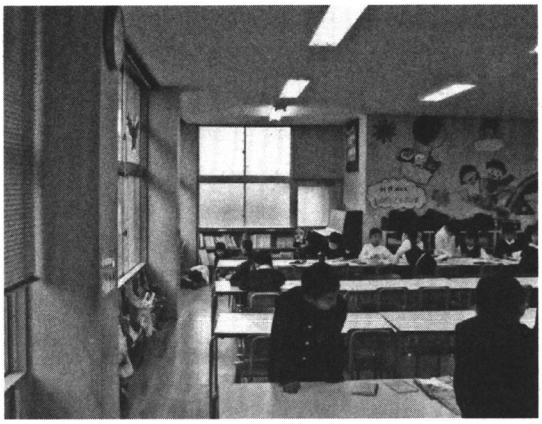


写真４　Ｂ児童館の児童クラブ室

（３）児童クラブとその他の機能を含む施設

Ｃ児童館はコミュニティセンターの中にあり、児童館部分の床面積は192㎡である。隣接地に保育園、小学校があり、子どもたちが来やすい環境にある。この児童館から直接小学校の校庭につながっていて、外遊びの環境としても良好である。但し、専用の屋外遊戯場はないので、小学校の校庭を使う地域のスポーツ少年団などと競合したり、遊び環境が危険になったりすることもある。

施設の１階が児童館、児童クラブの空間とコミュニティセンターの一部に充てられ、２階はコミュニティセンターの空間になっている。児童館と児童クラブの室内空間には、事務室、遊戯室、学習室（児童クラブ室）があるが、小学校にも空き教室を利用した児童クラブの空間がある。また、遊戯室と学習室（児童クラブ室）の間には、共同スペースがつくられていて、机と椅子が置かれている。児童が勉強をしたり、話をしたりする場になっていて、地域の大人も利用している（写真５）。この共同スペースは、児童館、児童クラブ、コミュニティセンターの複合施設ならではの空間であり、地域の人々の交流の場として位置付けられている。職員は館長１名（専任）を含め11名と多い。10名が児童厚生員である。11名のうち９名が児童クラブとの兼任である。

児童館の遊戯室は約６ｍ×９ｍで、ここにベビーベッド、遊び道具、本やパソコン（１台）

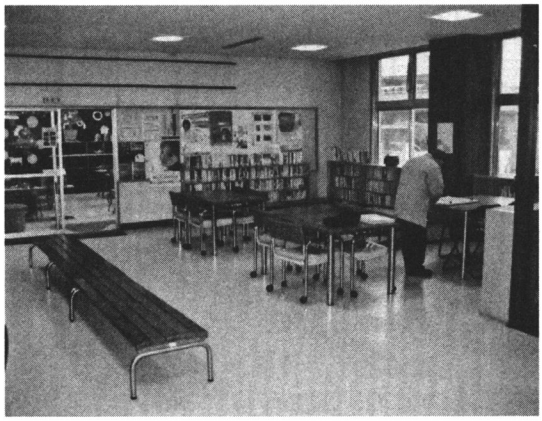


写真５　Ｃ児童館の共同スペース

写真６　Ｃ児童館・遊戯室内のパソコン

が置かれている（写真６）。これらの備品の中には地域の人々の寄贈によるものもたくさんある。１日当たりの利用者は2008年度で88名とかなり多い（同上資料による）。

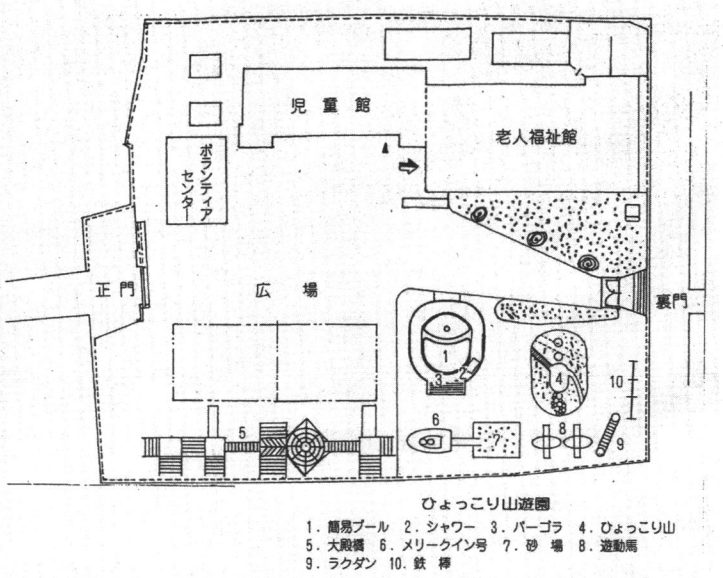


図３　Ｄ児童館（地域施設との併設）の配置図

Ｃタイプと似たものに、児童クラブを含まない児童館と地域施設の複合施設であるＤタイプがある。図３はそのタイプの例である。この児童館は老人福祉センターと併設されているが、敷地面積が4,371㎡と広く、児童遊園を中心に、多くの遊具も置かれている。そのためか、児童とともに乳幼児やその保護者にもよく利用され、１日当たりの利用者は85名とかなり多い（前掲資料による）。職員は館長（専任）１名を含めて３名である。

（４）山口県児童センター

山口県児童センターは、敷地面積11,773㎡、延床面積2,281㎡、屋外遊戯場10,043㎡の大型児童センターである。この施設は県内児童館の中核的存在として設立され、①発達段階に沿った遊びの体験、プラネタリウム、文化、科学工作などの活動により児童の健全育成、②運動、遊びを通じての体力増進、③児童福祉関係者の研修、児童館活動に関する情報収集と提供、④家庭で子育てをする親子の居場所、相談場所、⑤母親クラブ、地域団体等の自主的活動場所といった機能を有している。職員は館長１名（専任）、児童厚生員５名を含め、８名である。

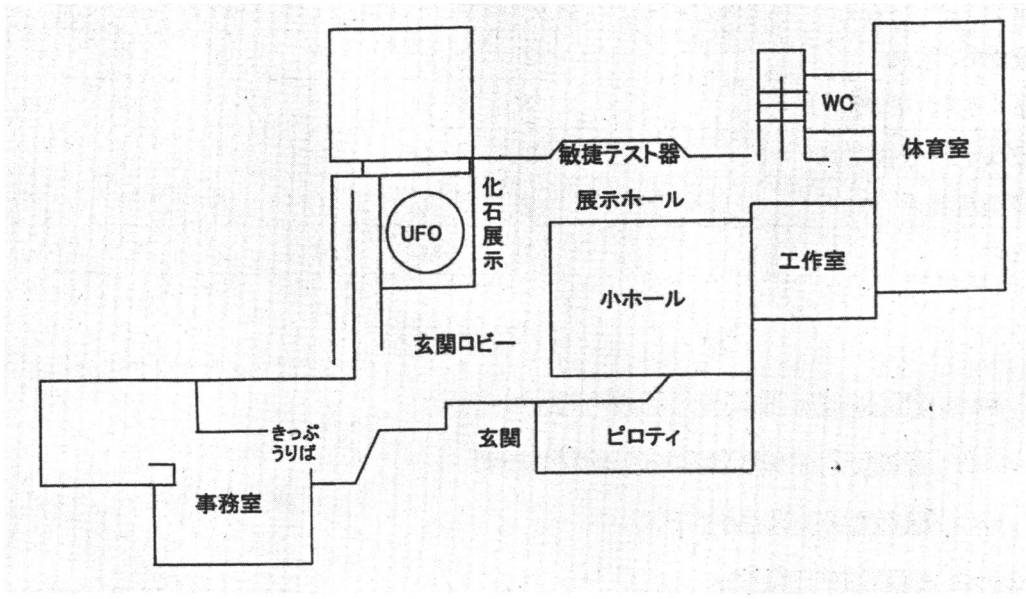
外遊びの空間については、建物周りに広い児童遊園がつくられていて、そこには大型ブリッジ、大滝ネット（ネットでできたジャングルジム）、大型複合遊具、大型ブランコ、滑り台、リンク遊具、大型木製遊具、小型ブリッジ、幼児用滑り台などの遊具が設置されている。様々な年齢の子どもに配慮されていることがわかる。

室内空間では、遊戯室、図書室、工作室、体育室、小ホール、大ホール、プラネタリウム、UFO（山口の名所を見ることができる「UFO型マイタウン飛行装置」）などがある。小ホールや大ホールは催し物の会場として使われる。遊戯室には授乳スペースもあり、乳幼児が保護者と一緒に遊ぶことができる空間となっている。体育室には身長計、体重計等の測定器具や、体力診断のできる道具もあり、体力増進のための空間として利用されている。ここには卓球台も置かれ、室内で身体を動かす遊びができるようになっている。また、プラネタリウムやUFOのような学習空間もある。室内遊びでも充実していることがわかる。

山口県児童センターには様々な遊具や遊び道具（フリーテニス、バスケットピンポン、フリスビーなどのスポーツ用具、絵本、大型積み木など）もあるが、2009年度には、次のようなオリジナル事業が行われていた。①「遊ぶ」事業として、幼児とその保護者を対象にした健康

体操や子どもの日にちなんで、親子で遊ぶ「忍者修行道場」の開催、②「観る」事業として、紙芝居やパネルシアター、映画鑑賞会の開催、③「聴く」事業として、吹奏楽コンサートの開催、④「創る」事業として、電気で動くボートをつくる教室や竹細工を親子で楽しむ企画、⑤「集う」事業として、三世代の交流の場を提供、⑥「学ぶ」事業として、環境教室の開催やセンター周辺の美化活動の実施である。

年間の利用者は2005年度が429,589人、2008年度が497,362人と増加している。2008年度の１日当たりの平均利用人数は1,691人で、内訳をみると、乳幼児が617人、児童が423人、その他651人となっており、乳幼児やその保護者が多いことがわかる。



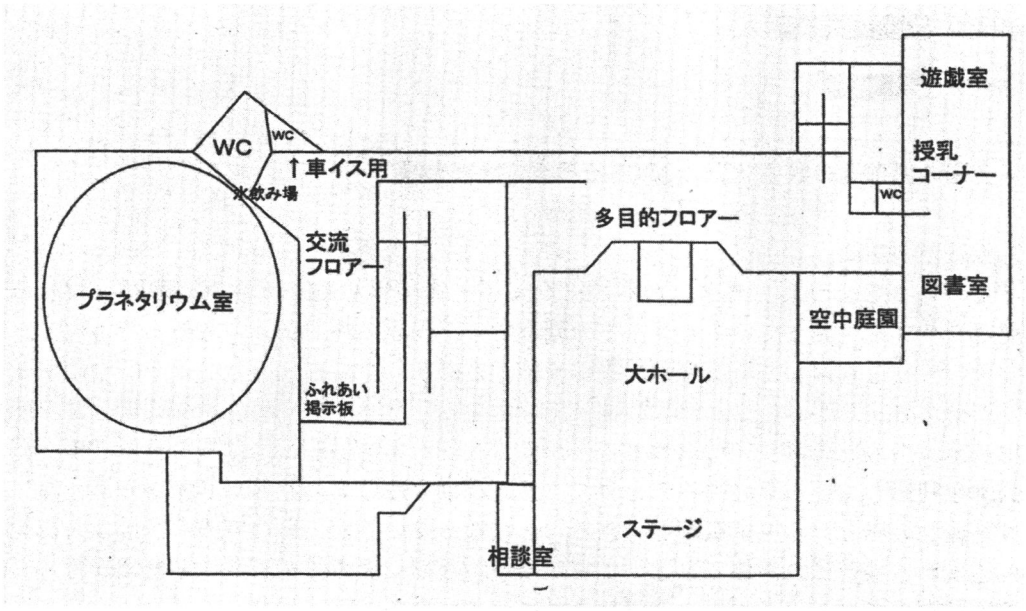


図４　山口県児童センターの平面図（上が１階、下が２階）

4．児童館の遊び環境

児童館における外遊びや室内での遊びとその環境について、各児童館にアンケートで尋ねた。回答があったのは、聴取調査をした３館（山口県児童センターは除く）を含めて25館であった（回答数27のうち２館は施設の空間構成等が不明）。屋外遊戯場、室内の主な施設の有無について、表２に示した。また、児童健全育成推進財団が2006年度に行った、全国の児童館実態調査の結果を図５に示した。

表２　児童館の施設状況

児童館タイプ	屋外遊戯場	遊戯室	集会室	学習室	図書室	静養室	計
児童館専用(A)	2	3	3	1	3	1	3
児童クラブ併設(B)	2	9	8	9	7	7	9
児童クラブ・他複合(C)	2	8	4	8	7	3	8
地域施設複合(D)	2	5	5	1	5	1	5
回答数	8	25	20	19	22	12	25

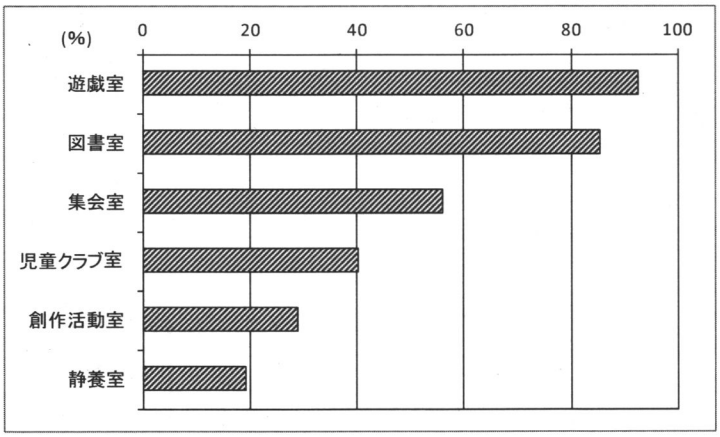


図５　全国の児童館の設備状況（2006年度実態調査結果）

（１）外遊びの空間

表２からわかるように、外遊びの空間となる屋外遊戯場を設けている児童館は32％と少ない。児童クラブを併設しているＢタイプの施設では、先述の聴取調査でもあったように、近くの小学校の校庭を利用しているとの回答が６館からあり、なんとか外遊びの空間を確保している様子が伺える。しかし、これ以外の地域施設を含んだＣタイプやＤタイプの場合は、屋外空間が地域施設用の駐車場に充てられることが多く、駐車場を外遊びに使っているとの回答、近くの公園を利用している等の回答とともに、外遊びはしないとの回答も６館からあった。児童館には外遊びの場となる児童遊園を設けることになっているが、複合施設の一部として児童館が組み込まれる場合は、確保されないことが多い。なお、児童健全育成推進財団が行った全国児童館実態調査では屋外遊戯場の状況はつかまれていない。

外遊びの内容については、次のような回答が多かった。乳幼児の場合は滑り台などの遊具で

の遊び、砂場での遊び、ままごとであった。児童の場合は、サッカー、鬼ごっこ、縄跳び、虫とり、ドッチボール、一輪車、木の実拾いなどで、中学生以上の場合は回答が少なかったが、サッカー、一輪車が挙げられた。虫とり、木の実拾いはこれが可能となる環境があり、児童厚生員の遊び指導が行われているのだろう。

外遊び空間はそれぞれの児童館の立地環境にも左右されるが、子どもが外で遊ばなくなったと指摘されることの多い今日、その環境の確保と遊び指導はもっと重視されてよい。

（2）室内遊びの空間

表2のように、室内遊びの場となる遊戯室は全ての回答施設にあった。しかし、行事や児童館の催しなどに利用される集会室はない施設も見られた。児童クラブがある場合は児童クラブ室となるが、そうでない場合は学習室に使われるような空間は、児童クラブがないと設置されていないことが多い。図書室は比較的多くの施設で設置されているが、どこにでもあるというわけではなかった。遊戯室や集会室の一部を図書コーナーに使っている場合もある。静養室の設置はさらに少ない。とくに地域施設の一部として児童館が設置されている場合は、静養室などが省略されがちである。しかし、児童クラブが存在する場合は必要な空間であり、実際にはカーテンで仕切ったスペースなど何らかの確保がされているとは思われるが、室空間として確保されている施設は少ない。

全国児童館実態調査結果で見ると、遊戯室は全国でも約93％の設置率であり、次いで図書室が85％、集会室は56％で、児童クラブ室は40％である。他の空間では、創作活動室が29％、静養室が19％見られる。山口県内と似たような状況であるが、創作活動室を設置している児童館は山口県内ではごく少なかった。また、併設施設についての調査結果では、併設施設がないものが40％で、併設施設で多いものは、老人・障害者福祉施設11％、公民館・市民センター９％、保育所８％、その他19％となっている[5)]。山口県内の児童館に多く見られる隣保館との併設はその他に該当するだろう。

室内遊びの内容では、次のような回答が多かった。まず幼児では、絵本、ブロック遊び、積み木、紙芝居、パズルなどが回答された。児童では、トランプ、オセロ、将棋、ブロック遊び、工作、本・絵本、積み木、折り紙、塗り絵、パズル、紙芝居、剣玉、コマなどが多く挙げられた。中学生以上では卓球、コミック、トランプ、オセロなどが挙げられた。幼児、児童、生徒に共通する遊びも多いが、少しずつ年齢による変化も見られる。また、児童・生徒にはゲーム機を持参する場合も見られ、厚生員がその対処に悩んでいる様子もうかがえた。

遊び道具については、幼児では、おもちゃ、絵本、ボール、折り紙、積み木などが多く備えられているが、児童向きには、ボール、トランプ、折り紙、積み木、おもちゃ、本、フラフープ、遊具などが多くの児童館で回答された。他には、絵かき道具、一輪車、竹馬、パソコン、卓球なども比較的多かった。生徒向きの回答は少なかったが、卓球、本、パソコン、ボールなどが挙げられた。また、遊び道具が十分にあるかを尋ねると、十分にあるとの回答が65％、十分ではないが35％であった。十分ではないと回答された理由をみると、乳幼児向けのおもちゃが少ない、屋外で遊ぶ道具が少ない、高学年向けの卓球台などがないなどの指摘があった。

厚生員は次のような遊びの指導をしていることもわかった。正しい遊具の使い方の指導、みんなで遊べる工夫をさせる、仲間に入れない子どもを出させない、順番を守るなど、ルールやマナーを守って遊ぶことができるようにする、一人で来館する子どもも一緒に遊べるようにするなどであった。このように遊び集団の形成を手助けしたり、遊び方を指導する大人がいるこ

とが児童館の特質である。

（3）利用者と職員の人数

表3　職員数と利用者数

児童館タイプ	職員数	厚生員数	平日利用者	休日利用者	年間利用者
児童館専用(A)	3	2	89	91	22,414
児童クラブ併設(B)	4.4	2.8	38	25.7	16,694
児童クラブ・他複合(C)	6.3	5.1	24.4	23.3	13,094
地域施設複合(D)	2.8	1.8	12	12.3	3,223
平均	4.5	3.2	36.1	30.9	14,114

表3はアンケートに回答された職員数と利用者数を児童館のタイプ別に集計して平均を示したものである。職員数や厚生員数では児童クラブを併設しているBやCタイプの児童館がやや多くなっているが、代表的なタイプの児童館の項で述べたC児童館のように11名の職員が配置されているものは例が少ない（2例のみ）。児童館の職員としては、館長1名と厚生員2名の3名が基本である。これに児童クラブや地域施設の併設によって、職員数が変わる。回答児童館の平均職員数は4.5人で、厚生員が3.2人であった。

利用者数は児童館タイプによって違いがある。児童館専用施設が平日、休日とも他のタイプよりもかなり多い。児童クラブが含まれている場合は、利用者が固定して、それ以外の利用者があまり多くない状況が共通してみられる。児童クラブがない複合施設では、幼児、児童、生徒のいずれも利用者が少ない。全体では、児童クラブを含む施設が多いので、休日よりも平日の利用者がやや多い結果となった。

さらに多くの子どもたちが児童館に来るためには何が重要か、を選択肢方式によって回答を求めた（複数回答）。多かった回答は、「遊具の充実」（38%）、「児童館の行事」（38%）、「施設の増改築などの整備」（33%）、「スタッフの増員」（29%）、「広報活動の充実」（24%）、「学校との連携」(19%)などであった。「遊具の充実」は児童クラブを含む施設で回答が多かったが、こうした児童館では、幼児や高学年児童、中学生などの遊具が不足していると理解できる。また、児童館の行事や広報活動の充実など、児童館の取組で改善できることもあるが、施設の整備やスタッフの充実など自治体が施策として検討しなければならないこともある。

5．まとめと考察

山口県内には2010年度で39の小型児童館と1つの児童センターがあるが（2011年度には児童センターが増えた）、その数は自治体の施策と関連して一様ではない。しかし、全国的にも県内でも新規の児童館建設は少ない。小型児童館を施設機能からみると、4つのタイプに分類できる。①児童館専用施設、②児童クラブを含んだ施設、③児童クラブと地域施設を含んだ施設、④地域施設との併用施設である。山口県内では②や③のタイプが多く、児童クラブを含んだものが25館と64%を占める。小学校等との連携の重要性など、どのタイプにも共通して言えることもあるが、タイプによって違っている課題もある。検討すべき課題には次のようなも

のがある。

1つは、外遊びの環境である。児童館には児童遊園を設置することになっているが、そうした児童遊園が確保されている児童館は多くない。近くに小学校がある児童館では小学校の校庭を利用している例もあるが、実際には地域のスポーツ少年団の活動と競合して、校庭を利用できないのが実情である。また、③や④のように、地域施設が含まれている場合には、敷地が駐車場化して、駐車スペースを外遊びの場にしている例も多い。外遊びが不足しがちなので、駐車場は別に確保するなどによって、安全な外遊びの場を確保することが重要な課題である。

2つ目は児童クラブと一般の来館児童等が共存できるように工夫することである。児童クラブのニーズが高くなっているので、②や③の児童館では児童クラブの活動が中心になり、それ以外の幼児、児童、生徒の利用があまり多くない。児童館は学童保育所（児童クラブ）とは違って、全ての児童に健全な遊びを与えるという目的を持っているので、地域の様々な子どもたちの要求に応える必要がある。この点では、児童館専用施設の活動に学ぶことが重要であるが、学校等に児童館の活動を知らせる必要もある。

3つ目は、様々な子どもたちが遊びたくなる道具・遊具が決して十分ではないということである。児童クラブを含んだ施設では、児童クラブの子どもたち以外の乳幼児、小学校高学年、中高生の遊び道具・遊具が不足しているとの声が多かった。予算も限られているので、地域の人たちの寄付に頼らざるを得ない施設も多いようであるが、地域にもしっかり訴えていくことが重要であろう。

もう1つは、自治体が児童館に関する施策を持つことである。屋外の遊び場の確保、高まる児童クラブのニーズへの対応やそれ以外の子どもたちへの遊びの提供のための児童館の改修、遊びの指導者の配置や予算措置など、児童館ではできないことも多い。やはり自治体が地域の子どもや親のニーズをとらえて、児童館施策にまとめることが不可欠である。

謝辞

本調査研究にあたっては、山口県子ども未来課、山口市児童家庭課、並びに各児童館の職員の皆様にご協力をいただきました。記して謝意を表します。

注

1）2010年に発表された「子ども・子育てビジョン」では、学童保育児童を2014年には30万人増やすという目標も示されている。このことは、「山口県の学童保育所における遊び空間」（山口大学教育学部研究論叢、第61巻第3部、2011年）で述べた。

2）小型児童館は、小地域を対象として、児童に遊びを与えるとともに、母親クラブ、子ども会等の地域組織活動の育成助長を図る等、児童の健全育成に関する総合的な機能を有するもの（原則として217.6㎡以上の建物面積）、児童センターは、小型児童館の機能に加えて、運動、遊びを通して体力増進を図ることを目的とした指導機能を有するもの（原則として336.6㎡以上）、大型のA型は児童センターの機能に加えて、都道府県内の小型児童館、児童センター、その他の児童館の指導及び連絡調整等の役割を果たす中枢的機能を有するもの（原則として2,000㎡以上）、B型は小型児童館の機能に加えて、自然の中で児童を宿泊させ、野外活動が行える機能を有するもの（原則として1,500㎡以上）、C型は芸術、体育、科学等の総合的な活動ができるように、劇場、ギャラリー、屋内プール、コンピュータープレイルーム等が敷設され、多様な児童のニーズに総合的に対応できる体制にあるもの、

この他に、小型児童館に準ずるその他の児童館がある。

3）本調査時には建設途中だったため、この児童館は調査対象外である。

4）児童館に付設することになっている児童遊園のことであるが、山口県子ども未来課の資料では屋外遊戯場としているので、同じ表現を用いた。

5）平成18年度全国児童館実態調査結果、p.9